

中学校学習指導要領解説数学編第 2 章 1(2)「領域の構成」(p.37) から

1 以下の文章の空白を埋めよ。

四つの領域について

中学校数学科の内容は、「A ( )」、「B ( )」、「C ( )」、「D ( )」の四つの領域と〔数学的活動〕で示している。目標においても示されているように、数量や図形については学習の対象として明確に位置付けられている。したがって、普遍的かつ基礎的な内容の領域として「A ( )」及び「B ( )」を挙げるのは当然であり、平成 20 年改訂の学習指導要領でも多くの時間がこの二つの領域の指導に充てられている。「C ( )」及び「D ( )」は、数学を ( ) する力の伸長を目指すための領域として設定し、数学的な ( ) を十分に働かせた数学的活動を充実するとともに、いろいろな関係や特徴を積極的に考察の対象とすることが必要である。

このように見ると、「A ( )」、「B ( )」、「C ( )」及び「D ( )」の領域の相互の関係は次のように説明できる。考察の対象を視点として、それが主に ( ) 事象であるか ( ) 事象であるかにより、「A ( )」、「B ( )」及び「C ( )」の三つの領域と「D ( )」の領域に分けられる。さらに、「A ( )」、「B ( )」及び「C ( )」の領域は考察の方法を視点として、それが主に ( ) であるか ( ) であるかにより、「A ( )」と「B ( )」の二つの領域と「C ( )」の領域に分けられる。「C ( )」の領域の学習で働かせた ( ) 的な見方・考え方は「A ( )」や「B ( )」の領域の内容の理解を深化させてくれる。また、「C ( )」の領域の内容を理解するためには「A ( )」や「B ( )」の領域の内容の理解が不可欠である。本章第 1 節の 2 の (1) で既に述べたように、四つの領域の間には密接な関連があり、このことに配慮した指導が必要である。

なお、今回の改訂では、従前の「資料の活用」の領域の名称を「( )」に改めた。これは、平成 21 年 3 月改訂の高等学校学習指導要領数学 I において、生活の中で活用することや統計学とのつながりを重視し、一般的に用いられる「データ」という用語を用いたことや、小・中・高等学校の学習のつながりを考慮したためである。

また、今回の改訂では、幼児期に育まれた数量・図形への関心・感覚等の基礎の上に、小・中・高等学校教育を通じて育成を目指す ( ) を明確化することを意識し、引き続き小学校と中学校との関連や連携について配慮した。この点について、小学校算数科では、第 ( ) 学年、第 ( ) 学年、第 ( ) 学年、第 ( ) 学年の四つの段階を設定し、それぞれの学年までに育成を目指す資質・能力と働かせる数学的な見方・考え方を明示した内容構成としており、「A ( )」、「B ( )」、「C ( )」(下学年)、「C ( )」(上学年)及び「D ( )」の五つの領域で示している。これは、内容の ( ) や発展性の全体を、中学校数学科との接続をも視野に入れて整理したものであり、それぞれの領域の関連について理解しておく必要がある。

2 内容から解答を導くポイントと考えたことを述べよ。

3 この問題の解答を自己評価し、

気づいたこと、感じたことを述べよ。

■ 5 段階自己評価 ( )

